

Title	世阿弥伝書にみる「鬼」の習道 : 下三位の芸風解釈の視点から
Author(s)	澤野,加奈
Citation	演劇学論叢. 2006, 8, p. 38-52
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97499
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

世阿弥伝書にみる「鬼」の習道

----下三位の芸風解釈の視点から----

澤野

はじめに

此見風ト成所也」と記し、「力動風鬼」を当流においては 演じないものとしている。 示した末尾には、「力動風鬼ハ、勢形心鬼也。其人体、瞋 説明されており、老体・女体・軍体の三体の条のあとに、 載せている。「三体作書条々」のなかでは、能の書き方が て種・作・書の三要素を説くほかに、「三体作書条々」を 弥から息男元能に与えられた伝書である。能作の根本とし ル態相ノ異風也。此風形、当流ニ不得。只、砕動風鬼、以 放下、砕動風鬼の条がおかれる。砕動風鬼の能の書き方を 応永三十年(一四二三)の奥書をもつ『三道』は、世阿

至極の上手が、「闌たる位の態」として恐ろしい鬼を演じ しさを見る者に印象づけるような鬼のことである。しかし 「力動風鬼」とは、力強い動きによって演じられ、恐ろ

動風」に演じられる鬼について検討したが、そこでは同時

和五年(一三四九)〕では、「異物」として「常に用いざる所 論における鬼の見方にもそうした解釈が用いられていると 事もあり」とし、鬼をめずらしきものとしているが、能芸 の鬼風情の物也。時によるべし。珍しき物、目覺て興ある でもあった。二条良基の連歌論を載せる『連理秘抄』〔貞 れば、それはめずらしさとなり、面白き所となり得るもの

受けられる。和歌の修練の階梯をもとに、立体的な習道の 再検― 「砕動風」 「力動風」 の位相の変遷―」 では、主に 「砕 じることは、極めたる上手が演じた鬼についての評価を覆 階に応じた表現がなされた。以前、拙稿「世阿弥の『鬼』 体系を組むことで、芸位はより細分化され、習道の達成段 を構築し、芸態に対するあらたな見方を提示したように見 すことにもつながるが、世阿弥は却来を用いた習道の体系 いえよう。 そうしたなかで、「力動風」というひとつの演じ方を禁

がそこで捉え直した鬼の能についてみてゆくことする。のちに書かれたと考えられる習道の体系を通して、世阿弥重複する部分もあるが、本稿では、「力動風鬼」を禁じたかに位置づけられていることを考察している。一部前稿とかに位置づけられていることを考察している。一部前稿とに、観阿弥や出家以後の世阿弥によって演じられた鬼が、

一 『三道』以前の強く恐ろしき鬼

次のような問題のあることを指摘している。 な芸風であるとしているが、そこでは鬼を演じるにあたりの物。一大事也」とあり、鬼の能は大和猿楽において重要の物。一大事也」とあり、鬼の能は大和猿楽において重要第二物学条々にみる「鬼」の条には、「是、ことさら大和がどのように描かれているか確認しておく。『風姿花伝』まず、『三道』以前に書かれた伝書のなかで、鬼の演能

さら花を知らぬ為手なるべし。されば、若き為手の鬼さりながら、それも、鬼ばかりをよくせん物は、ことのもき心と面白きがあらん為手は、極めたる上手とも申べきか。面白かるまじき道理あり。恐ろしき所、本意なり。恐抑、鬼の物まね、大なる大事あり。よくせんにつけて、

しなみ、巌に花の咲かんがごとし。べきか。くはしく習ふべし。たゞ、鬼の面白からむたばかりをよくせん物は、鬼も面白かるまじき道理あるは、よくしたりとは見ゆれども、更に面白からず。鬼

『花伝第七別紙口伝』のなかで、次のように説かれている。いうべきであろうかとしている。鬼の面白さについては、し、恐ろしい鬼の能を面白く演じる為手は、極めた上手と演じる為手の鬼にも面白さは見出し難いという。それに対演じたとしても、面白い能にはならず、また鬼ばかりを鬼は本来恐ろしいものであるため、若い為手が鬼を十分

巌バカリニテ、花ハアルベカラズ。コレ花ナリ。シカレバ、鬼バカリヲセンズル為手ハ、コ、思イノ外ニ鬼ヲスレバ、メヅラシク見ユル、所、ヲ残サズシテ、幽玄至極ノ上手ト人ノ思イ慣レタル所ソノ風体ナシ。コレ、巌ナリ。花トイフハ、余ノ風体強ク、恐ロシク、肝ヲ消スヤウニスルナラデハ、ヲヨ「巌ニ花ノ咲カンガゴトシ」ト申シタルモ、鬼ヲバ、

は、めずらしさがなく、巌のようなものであるが、幽玄を強く、恐ろしく、肝を消すような鬼ばかりを演じていて

「巌に花の咲かんがごとし」と同様の論理は、次にみるらしさとなり、花となり得ることを示している。極めた為手が思いのほかに鬼を演じることで、それがめず

『至花道』(応永二十七年〔一四二〇〕 奥書)の「 闌位事」 のな

かにもみえる。

抑、闌たる位の態とは、此風道を、若年より老に至るはあらず。なにと心得て似せ学ぶやらん。り。この闌けてなす所の達風、左右なく学ぶべき事に異風を見する事のあるを、初心の人、これを学ぶ事あ典風に、上手の極め至りて、闌たる心位にて、時々此芸風に、上手の極め至りて、闌たる心位にて、時々

り。これは、上手の風力を以て、非を是に化かす見体り。これは、上手の風力を以て、非風がいる。 を、是風に少し交ふる事あり。上手なればとてなにのため非風をなすぞなれば、これは上手の故実なり。よため非風をなすぞなれば、これは上手の故実なり。よため非風を稀に交ふれば、上手のためは、これ又めづらしからで、見所の見風も少し目慣る、やうなる処で、非風を稀に交ふれば、上手の見する手立の心力非を除けて、巳上して、時々上手の見する手立の心力までの年来稽古を、ことごとく尽くして、是を集め、までの年来稽古を、ことごとく尽くして、是を集め、までの年来稽古を、ことごとく尽くして、是を集め、までの年来稽古を、ことごとく尽くして、是を集め、までの年来稽古を、ことごとく尽くして、非正の心力を以て、非を見いる。

也。されば、面白き風体をもなせり。

自体は、面白き風情の少ないものとされている。また、「砕

通常ならば「嫌い除けつる」芸風ということになる。また、具体的な内容は示されていないが、非は是の対義語であり、交えることでめずらしさが生じることになる。「非風」のて見所の目には映る。そうしたなかに、稀に異風・非風を至極の上手がよき風を演じても、それが当然のこととし

)原治と悪いによっては片としてである。けたる位の態」としてみせる「異風」の内容に、「力動風鬼」風鬼」を「異風」として表記している。そのことから、「闌「異風」の用例は『三道』のなかにみえ、そこでは「力動

国本とでなっても急気に一見ければ、目となかし、いとかの見風にて、面白きよそほひ少なし。然共、曲風を重ね、り、その演じ方として、「是は、力を体にしてはたらく風は唐冠をかむり、笞をもった冥途の鬼の絵図が描かれてお図とともにその演じ方が記されている。「力動風」の項に図とともにその演じ方が記されている。「力動風」の項に図とともにその演じ方が記されるだろう。

く老若・童男・狂女などにも応用される演じ方として示さりて砕動之心根可有」とある。「砕動風」は、鬼だけでななる所、則砕動之人体也。物じて、はたらきと申は、此砕なる所、則砕動之人体也。物じて、はたらきと申は、此砕がゆへに、身に力をさのみ持たずして立ちふるまへば、はがゆへに、身に力をさのみ持たずして立ちふるまへば、は動風」の項には、「此砕動風、形は鬼なれ共、心は人なる

では、和歌の修業論から影響を受けたと考えられる、能芸鬼を「砕動風」に演じるものとされ、「力動風鬼」の演能とは別の位置づけへと導かれたように見受けられる。以下鬼は、あらたに用意される習道の体系のなかで、「力動風鬼」の演能鬼を「砕動風」に演じるものとされ、「力動風鬼」の演能見三道』の「砕動風鬼の能作」において、若き為手たちは、『三道』の「砕動風鬼の能作」において、若き為手たちは、

二 習道の順序 ― 「拉鬼躰」の習道に照らして―

の習道論についてみてゆく。

の最後に置かれている。

二曲と、老体・女体・軍体の三体を習道の入門とし、「此『花鏡』がある。『至花道』の「二曲三体事」では、舞歌の『道の基本課程を二曲三体として示す伝書に、『至花道』

年次は不明な伝書だが、応永三十五年の奥書をもつ『六義』体的な体系を組んでいる。『九位』は奥書をもたず、成立を取り込みながら、「九位」という能芸の位階を用いて立を取り込みながら、「九位」という能芸の位階を用いて立る『九位』の「習道の次第条々」では、二曲三体の習道論へといった一方向的な修業の流れを示しているが、次にみへといった一方向的な修業の流れを示しているが、次にみへといった一方向的な修業の流れを示しているが、次にみへといった一方向的な修業の流れを示しているが、次にみへといった。

以降のものとして考えておく。れていないことから、本稿では、『九位』の成立を『三道』れていないが、『三道』のなかに『九位』の内容が反映さ前の成立とされている。それがどれほど以前なのかは明のなかに、「九位」の名目が用いられているため、それ以

において、不二妙体の意景があらわされるというものであ こ位を強細風・強鹿風・鹿鉛風とし、それぞれの芸位の内 三位を強細風・強麁風・鹿鉛風とし、それぞれの芸位の内 で後半にみる「習道の次第条々」では、「九位」の位階に みる習道の順序を次のように示している。まず、中三位の の後、「広精風」を経た「正花風」において二曲より三体 に至り、「寵深花風」では究極の幽玄な姿を成し、有無中 に至り、「寵深花風」では究極の当な姿を成し、有無中 に至り、「寵深花風」では完極の当な姿を成し、有無中 に至り、「鬼深花風」では完極の当な姿を成し、有無中 に至り、「鬼深花風」では完極の当れるというものである。 『九位』は能の芸位を九段階に分け、上三花を妙花風・ 『九位』は能の芸位を九段階に分け、上三花を妙花風・

ている。

能の修業にみる「中初・上中・下後」といった階梯は、

「大のように説いている。『九位』の「習道の次第条々」では、観阿弥の芸風につ

此中三位より上三花に至りて、安位妙花を得て、さて

いる。十体の最後におかれた鬼拉体は、「たやすくまなび

る。

爰に、中初・上中・下後までを悉成し事、亡父の芸風りしなり。是は、「大象兎蹊に遊ばず」と云本文の如し。堪能の芸人共の中に、下三位には下らざる為手どもあ和風の曲体ともなるべし。然共、古来、上三花に上る却来して、下三位の風にも遊通して、其態をなせば、却来して、下三位の風にも遊通して、其態をなせば、

にならでは見えざりしなり。

にも遊通するという、「中初・上中・下後」を成したとしけが、中三位から入門し、上三花へ上り、そこから下三位らなかった堪能の為手がいるなかで、亡父である観阿弥だが見出されている。上三花にのぼり、そこから下三位に下ており、却来して演じた下三位の態のなかに「和風の曲体」「九位」では、上三花から下三位に下ることを却来とし

として、長高様・見様・面白様・有一節様・濃様を設けてきすがた」を自在に詠めるようになったあとに詠むべき姿麗様・有心体を「もとの姿」とし、この「すなほにやさしによってなされている。『毎月抄』では、幽玄様・事可然様・型となっているという指摘が、峯村文人氏や小西甚一氏ら定家の『毎月抄』に示された和歌の十体の修業の順序が原

詮か侍らん」とされ、初心のときは学び難い姿であるが、何のいまであるが、おそろしげによめらんは、何のる物にも、やさしく物あはれによむべき事とぞ見え侍るめる。げにいかにおそろしき物なれども、哥によみつれば、る。げにいかにおそろしき物なれども、哥によみつれば、る。げにいかにおそろしき物なれども、哥によみつれば、るがにも、などかよまれ侍とか侍らん」とされ、初心のときは学び難い姿であるが、何い時にはなどかるであるが、がはいけによるでものでは、などかよまれ侍とかけらん」とされ、初心のときは学び難い姿であるが、る物にも、初心のときは学び難い姿であるが、何いけによりであるが、何いけによりです。

記』の記述を掲げる。下には「強力体」を列ねた「拉鬼体」について説明する、『三五作者を定家に仮託し和歌の秘書として扱われているが、以りも詳しく載せるものに『三五記』がある。『三五記』は、修練の後に詠むべき「鬼拉体」の説明を、『毎月抄』よ

練磨の後ならば詠むことができるという。

の本意なりと金吾も仰られけるとやらむ。是を無上とたなり。はじめに是をよめば、愛どをになり行て、甚がけながら、よまずして稽古に入ぬれば、こゝろもすかけながら、よまずして稽古に入ぬれば、こゝろもすかはながら、よまずして稽古に入ぬれば、こゝろもすかは躰は、歌の無上とやらむ。すべて讀ぬきがたきすが此躰は、歌の無上とやらむ。すべて讀ぬきがたきすが

め侍る。
め告る。
め告る。
かける。
のよい、人ごとにまだいたらぬも、かなはぬも、がける。
がかって此躰をば、慮外になされしにや。されども家のかつて此躰をば、慮外になされしにや。されども家のかつて此躰をば、慮外になされしにや。されども家のがつて此躰をば、慮外になされしにや。されども家のがと亡父卿もすてられき。たゞ幽玄によみならべて、がと亡父卿もすてられき。たゞ幽玄によみならべて、がと亡父卿もすてられき。たゞ幽玄によみならべて、がと亡父卿もすてられき。たゞ幽玄によみならべて、がと亡父卿もすてられき。とればおそるべき様色めかしくもでは、人ごとにまだいたらぬも、かなはぬも、がける。

なかった堪能の芸人がいるなかで、観阿弥のみが上三花か鬼躰」を詠むことが戒められているが、のびやかに詠みつのり、詞もものつよくなるころには、自然に詠むことがでのり、詞もものつよくなるころには、自然に詠むことがでった、強玄に詠むものとした。その俊成が言うことには、定ず、幽玄に詠むものとした。その俊成が言うことには、定ずに詠むようにとされている。俊成が幽玄をもっぱらとして「拉鬼躰」を習得したように思われるので、はばからない「拉鬼躰」を「慮外」とするい。明弥のみが上三花か常がった堪能の芸人がいるなかで、観阿弥のみが上三花かなかった堪能の芸人がいるなかで、観阿弥のみが上三花かなかった堪能の芸人がいるなかで、観阿弥のみが上三花かなかった堪能の芸人がいるなかで、観阿弥のみが上三花かなかった堪能の芸人がいるなかで、観阿弥のみが上三花かなかった堪能の芸人がいるなかで、観阿弥のみが上三花かなかった堪能の芸人がいるなかで、観阿弥のみが上三花かなかった堪能の芸人がいるなかで、観阿弥のみが上三花かなかった堪能の芸人がいるなかで、観阿弥のみが上三花かなかった堪能のでは、

ゆくことにする。 ら下三位に下る過程に呼応しているようにみえる。『三五ら下三位に下る過程に呼応しているように思われる。 を、稽古の段階によって様相を変えているように思われる。 を、稽古の段階によって様相を変えているように思われる。 を、稽古の段階によって様相を変えているように思われる。 の者が詠み得ないように、世阿弥の設けた下三位のあり方の者が詠み得ないように、世阿弥の設けた下三位のあり方の者が詠み得ないように、世阿弥の設けた下三位のあり方の者が詠み得ないように、世阿弥の設けた下三位にある。『三五ら下三位に下る過程に呼応しているようにみえる。『三五ら下三位に下る過程に呼応しているように思われる。

「虎生れて三日、牛を食ふ気あり」とし、その説明には「虎曲風」をもみせる芸風ということになる。「強麁風」でははたらく風体であり、また同時に宝剣のような「冷へたるまじ」とあり、その説明を「金鎚の影動くは、強動風なり。まじ」とあり、その説明を「金鎚の影動くは、強動風なり。まず、『九位』における「下三位」の内容を確認しておまず、『九位』における「下三位」の内容を確認しておまず、『九位』における「下三位」の内容を確認してお

十分な芸風ということになる。「芸能の砕動ならぬは、麁くて鉛るなり」とあり、粗く不らうところに荒さをみている。「麁鉛風」は「五木鼠」とし、といへり」とあり、虎の勢いに強い気性を見出し、牛を食生れて三日、則勢有るは、強気なり。牛を食ふは麁きなり、生れて三日、則勢有るは、強気なり。牛を食ふは麁きなり、

粗さのみということになるだろうか。「強き」と「荒き」示され、「強麁風」では強さと荒さが混在し、「麁鉛風」はらき」という観点から分類すれば、「強細風」では強さがことが重要な要素であると言えるだろう。「強き」と「あ下三位の芸風においては、「強き」と「あらき」という下三位の芸風においては、「強き」と「あらき」という

き」についての記述を、『九位』の下三位の内容を理解すたものが「強き」になる。また、「荒き」については、「強き事かやうの数々の類は、強き物と申べきか」とし、「強き事かをうの数々の類は、強き物と申べきか」とし、「強き事かをうの数々の類は、強き物と申べきか」とし、「強き事かをうの数々の類は、強き物と申べきか」とし、「強き事かをうの数々の類は、強き物と申べきか」とし、「強き事かをうの数々の類は、強き物と申べきか」とし、「強き事かをうの数々の類は、強き物と申べきか」とし、「強き事かをうの数々の類は、強き物と申べきか」といいているでは、対しているできない。

容は一義的なものであるが、『九位』の「習道の次第条々」『九位』に示された「強細風」「強麁風」「麁鉛風」の内

るにあたって参考としてもよいだろう。

の内容については、『花伝第六花修』のなかで説かれており、

ように記している。では、下三位にいたる三種の道を示し、習道の体系を次の

して、九位の内とも云難かるべし。に下三位より入門したる為手は、無道・無名の芸体とは、上類の見風をなすべし。中位広精風より出て下三中・下後と習道したる堪能の達風にては、下三位にて下三位に於て、三数の道あり。中初より入門して、上

風の分力とされる。そのほかの、下三位より入門する為手の広精風から下三位に入るもので、それらは強細風・強麁「上類の見風」をみせるものである。ふたつめは、中三位ら入門して上三花に上り、そこから下三位に下る道であり、下三位にいたる道のひとつは、観阿弥のように中三位か

たとえば、禅竹に相伝された『拾玉得花』(正長元年〔一四二八〕る芸に関する世阿弥の言及は、他の伝書のなかにもみえる。中三位から入門して上三花に上り、 さらに下三位へと下

無道・無名としている。

奥書)第四問答には、

中三位より、上三花を極めぬれば、下三位にまじはる

そ、真実の安位とも云べけれ。に連花、まじはるとも染むべからず。此位の達人をこの位、上三花の定位のまゝなるべし。是、砂の金、泥花に至る曲位也。中初・上中・下後の次第〉、其為手も、〈爰二、九位中三位に達シテ、安位を得テ、上三

下三位から入門した「無道・無名の芸体」とは、その内容を入は下三位に下っても、「上三花の定位のまま」であることが述べられている。前引のように『九位』の「習道のなせば、和風の曲体ともなるべし」とあることから、中三位から上三花に上り、そこから下三位に下ってみせる「和風の曲体」の内容は、「上三花の定位のまま」のものであり、「上類の見風」をみせるものである。「和風の曲体」が下三位においても「上三花の定位のまま」のものであり、中三位から上三花に上り、そこから下三位に下ってみせる「和ば、中三位から下三位に下る「強細・強麁の分力」や、れば、中三位から下三位に下る「強細・強麁の分力」や、は、中三位から下三位に下る「強細・強麁の大力」や、は、中三位から入門した「無道・無名の芸体」とは、その内容を得て、さては、中三位から上三花に至ったという記事がある。ここでは、中三位から上三花に至ったという記事がある。ここでは、中三位から上三花に至ったという記事がある。ここでは、中三位から上三花に至ったという記事がある。ここでは、中三位の「習道の大力」とは、その内容を得ている。

ためてみておく。下三位から入門した為手は、「九位の内」段階によって異なることを踏まえて、下三位の芸風をあら同じ下三位でありながらも、その芸態の内容が習道の

をおのずから異にしていると言えよう。

却来して演じられる下三位の芸風とはどのようなものなのかには示されていないことになる。また、広精風から下三位の芸風にも適さないことになる。また、広精風から下三位に入る芸体は、「強細、」の「虎生れて三日、牛を食宝剣光寒まじ」や、「強麁風」の「虎生れて三日、牛を食った。」といった芸の内容に該当するだろう。広精風から下三位に入る芸体が、『九位』に示されている「強細風」の「金鎚影動きて、「強麁風」に該当するとき、中三位から上三花に上り、そっから下三位に下ってみせる「上類の見風」や「和風の曲ながら下三位に入る芸体が、『九位』にみる下三位の芸風のないには示されていないことになる。また、広精風から下三位の芸風とはどのようなものなのがには示されていないことになる。また、広精風から下三位の芸風とはどのようなものなのがに入る芸体は、「強細風」の具体的な内容は、『九位』にみる下三位の芸風とはどのようなものなのがによって演じるされていないことになる。また、広精風から下三位の芸風のは、上三花がら、「強細風」の「強細風」の「無細風」の「強細風」の「大きない」といいます。

四 「下三位」における「強き」の意味について(二)

だろうか、次節のなかでみてゆくことにする。

竹へと相伝された伝書である。『古今和歌集』の仮名序に永三十五年〔一四二八〕奥書)は、『拾玉得花』と同じ年に禅提示している『六義』をここではとりあげる。『六義』(応にあたり、九位の芸風に関して、『九位』とは別の見方を上三花から却来して演じられる下三位の芸風を考える上三花から却来して演じられる下三位の芸風を考える上三花から却来して演じられる「強細風」から―

の第一位の妙花風から廣精風までを、順次に配當して来たの第一位の妙花風から廣精風までを、順次に配當して来たら「強細風」までが並び置かれたかたちになる。「賦曲」には「龍深花風」をといった具合に順次配しているが、六義には位としての段階がないため、「妙花風」かるが、六義には位としての段階がないため、「妙花風」かるが、六義には位としての段階がないため、「妙花風」を、割り当てて見風を説明しているが、六義には「妙花風」を、割り当てて見風を説明といるが、一位というに関いている。

能であらうと思はれるからである」と評されている。文風を配しても、これに牽強附會的な説明を加へる事は可られてゐるのである。その理由は我々にはわからない。淺何故か淺文風を省いて、下三位の第一である強細風が配せのであるから、頌には、淺文風が配せられる順序であるが、の第一位の女才層大吃農業層書でも、別で書きていまれ

 みてみると、「広精風」から下三位に下った芸は、「強細・ 道の段階によって異なるという、習道の次第のあり方から 中三位・下三位という位階の順序とは異なる価値体系が適 中三位・下三位という位階の順序とは異なる価値体系が適 中三位・下三位という位階の順序とは異なる価値体系が適 大義の解釈に「強細風」が配されていることを、能勢

強麁の分力」であるため、中三位の「浅文風」よりも下の

であるとしていた。上三花の位を保持する下三位の芸風と花を極めれば、下三位においても「上三花の定位のまま」芸位になる。しかし、さきにみた『拾玉得花』では、上三

た、そのように考えてよいとすれば、「頌曲」にみる「強よりも上の芸位ということになるのではないだろうか。まして「頌曲」の「強細風」を捉えれば、それは「浅文風」

それでは、『六義』の「頌曲」に配された「強細風」を、風が示されていることにもなる。

細風」の内容は、上三花から却来して下三位へと下った芸

次に掲げる。 それでは、『六義』の「頌曲」に配された「強細!

安して以て楽しむ」と云々。治まるは、強き

ることの理由を、強細がいのままの曲であるため、そ祝の意をもつ「頌曲」に、「強細風」が割り当てられて祝の意をもつ「頌曲」に、「強細風」が割り当てられて、機也。返々、和らぐは強き道かと見えたり。

ら下三位に下ってみせる「和風の曲体」に照らしてみるこ義』「頌曲」の解釈は、中三位から上三花に上り、そこか下三位の「強細風」のなかに「和らぐ」ことを見出す、『六表』「頌曲」にみる「強細風」は、「和らぐ」ことと「強き」『六義』「頌曲」にみる「強細風」は、「和らぐ」ことと「強き」

とになる。
といできるだろう。『九位』の「習道の次第条々」では、「中とができるだろう。『九位』の「強細風」に示された「強き」の内容をあてはめてみれば、力強さとは別の次元の強さ、の共風に、『六義』 「頌曲」の「強細風」に示された「強き」の内容をあてはめてみれば、力強さとは別の法風にならでは見しかできるだろう。『九位』の「習道の次第条々」では、「中とができるだろう。『九位』の「習道の次第条々」では、「中とができるだろう。『九位』の「習道の次第条々」では、「中とができるだろう。『九位』の「習道の次第条々」では、「中とができるだろう。『九位』の「習道の次第条々」では、「中といてきるだろう。『九位』の「習道の次第条々」では、「中

大きにみた『花伝第六花修』では、鬼を「強き物」として紹介でいる。
 大って演じられたものになる。また、修練の後に演じ得るに強き」芸風の内容が、「慶風」として提示されたとすれば、よって演じられたものになる。また、修練の後に演じ得るに強き」芸風の内容が、「慶風」として提示されたとき、観鬼の演能を重ねてみることができる。そうしたとき、観鬼の演能を重ねてみることができる。そうしたとき、観鬼の演能を重ねてみることができる。そうしたとき、観鬼の演能を重ねてみるだろう。

五 修練の後に演じ得る鬼

この節では、修練の後に演じ得る芸態として示された、

に対して、世阿弥は次のように解答している。の様子を記している。禅竹が発した鬼の能についての質問日付の書状のなかで、出家の後に世阿弥が演じたという鬼享六年(一四三四)以降に、禅竹に宛てて送られた六月八鬼の演能についてみておく。世阿弥が佐渡に配流された永

大に鬼の能ノ事ウケ給候。是ハ、コナタノ流ニワス、状に鬼の能ノ事ウケ給候。是ハ、コナタノ流ニワス、状に鬼の能ノ事ウケ給候。是ハ、コナタノ流ニワス、状に鬼の能ノ事ウケ給候。是ハ、コナタノ流ニワス、状に鬼の能ノ事ウケ給候。是ハ、コナタノ流ニワス、状に鬼の能ノ事ウケ給候。是ハ、コナタノ流ニワス、状に鬼の能ノ事ウケ給候。是ハ、コナタノ流ニワス、状に鬼の能ノ事ウケ給候。是ハ、コナタノ流ニワス、状に鬼の能ノ事ウケ給候。是ハ、コナタノ流ニワス、状に鬼の能ノ事ウケ給候。是ハ、コナタノ流ニワス、状に鬼の能ノ事ウケ給候。是ハ、コナタノ流ニワス、状に鬼の能ノ事ウケ給候。是ハ、コナタノ流ニワス、状に鬼の能ノ事ウケ治候。

儀』(永享二年奥書)の序段には、音曲と芸風の側面から〈鵜世阿弥の芸談を元能がまとめた『世子六十以後申楽談阿弥も出家した後に、観阿弥に倣って演じているという。でもない鬼を、観阿弥が時々演じたことになっている。そでもない鬼を、観阿弥が時々演じたことになっている。そか動風」でも「砕動風」でも「砕動風」でも「砕動風」でも「砕動風」でも「砕動風」でも「砕動風」がある。

を次に掲げる。
を次に掲げる。
を次に掲げる。
を次に掲げる。
を次に掲げる。
を次に掲げる。
を次に掲げる。
を次に掲げる。

くと、ゆらめいたる体也。
くと、ゆらめいたる体也。さらりきくと、大様もかれを学ぶと申されける也。さらりきくと、大様を移す也。彼鬼の向きは、昔の馬の四郎の鬼也。観阿謡斗同音也。後の鬼も、観阿、融の大臣の能の後の鬼話斗同音也。後の鬼も、観阿、融の大臣の能の後の鬼を移す也。

第一条にみる闌曲の説明のなかでは、音曲における「闌けたるか、りは、又猶上也。大勢並み居て謡ふこと、皆上手たるか、りは、又猶上也。大勢並み居て謡ふこと、皆上手たるか、りは、又猶上也。大勢並み居て謡ふこと、皆上手な生成べし。此内、恋慕がかり、面白も、又大事也。闌けたる位に上りて後は、幽玄・恋慕・哀傷、何も自在成は、大勢具行は悪かるべし」とあり、「闌けたる位」では幽玄・恋慕・哀傷のいづれの音曲も自在に謡い得るという。音曲の曲味を示した『五音』のなかでは、「ゲニヤ世ノ」が引かれ〈鵜飼〉は哀傷に分類されているが、観阿弥はそが引かれ〈鵜飼〉は哀傷に分類されているが、観阿弥はそが引かれ〈鵜飼〉は哀傷に分類されている『五音曲条々』また、永享初年ごろの著述とされている『五音曲条々』また、永享初年ごろの著述とされている『五音曲条々』の話だけは同音であるが、はじめから終わりまで闌けたるの話だけは同音であるが、はじめから終わりまで闌けたるの話だけは同音であるが、はじめから終わりまで闌けたるの話だけは同音であるが、はじめから終わりまで闌けたるの話だけは同音であるが、はじめから終わりまで闌けたるの話だけは同音であるが、はじめから終わりまで、

ル、堪能ニアラズバカナウベカラズ。其人ニ相応シテ向去却来シテ、イヤ闌ケテ謡ウ位曲也。コノ性位ニ至取リ拉グ」ナド申ハ、コノ位ニテヤアルベキ。是ハ、位ナリ。歌道ニモ、十体ノ中ニ、強キ位ヲ云ニ「鬼ヲテ、是非ヲ一音ニ混ジテ、類シテ斉シカラヌ声ノナス闌曲者、高上ノ音声也。万曲ノ習道ヲ尽シテ、巳上シ

右の記述によれば、〈鵜飼〉の音曲は「面白の有様や」

知ルベシ。

たる位」の内容を、次のように示している。

即座の気転によって謡われる、闌けたるかかりによるものでた鬼が、音声でその勢いをあらわしたとすれば、それはない、「是非ヲ一音ニ混ジテ、類シテ斉シカラヌ声ノナスとは、「是非ヲ一音ニ混ジテ、類シテ斉シカラヌ声ノナスとは、「是非ヲ一音ニ混ジテ、類シテ斉シカラヌ声ノナスとは、「是非ヲ一音ニ混ジテ、類シテ斉シカラヌ声ノナスとは、「是非ヲ一音ニ混ジテ、類シテ済シカラヌ声ノナスによるで、「却来」を説く『九位』でいる。九位という位階のなかで「却来」を説く『九位』で、「おいる。九位という位階のなかで「却来」を説く『九位』で、「おいる。九位という位階のなかで「却来」を説く『九位』とされている。

風の名称は示されていない。

るが、「冥吏捜り求めて、久しく駐ることを得ず」として霊が悪趣に堕ち、「笞掠の余、拷案の隙」に河原院に現れには、融の大臣の能に、鬼に成て大臣を責むると云能に、ゆらりき~~とし、大になり、砕動風などには、ほろりと、添儀』の序段にある観阿弥の芸風では、「又、怒れること談儀』の序段にある観阿弥の芸風では、「又、怒れること談儀』の序段にある観阿弥の芸風では、「又、怒れること談儀」の序段にある観阿弥の芸風では、「又、怒れることが儀』の序段にある観阿弥の芸風では、「又、怒れることが、得詢〉の後場に出る鬼は「冥途の鬼」だが、それは観

であったと言えるだろう。

容をさしたものになるが、「砕動風」「力動風」といった芸らりきくくと、大様くくと、ゆらめいたる体」と同様の内とも演じている。「ゆらりきくくとし、大になり」は、「さ風」の演じ方だけでなく、「ゆらりきくくとし、大になり」観阿弥は「砕動風」に「ほろり」と演じているが、「砕動

ろり」とは、融の大臣の能において「砕動風」の形容に用面にては、鵜飼をほろりとせられし也」と記している。「ほ今の世になし。彼面にて、鵜飼をばし出だされし面也。異を「小癋見は、世子着出だされし面也。余の者着べきこと、『申楽談儀』第二十二条では、世阿弥が演じる〈鵜飼〉

の鬼」に倣ったとすれば、「ゆらりきく~とし、大になり」の鬼」に倣ったとすれば、「ゆらりきへ、融の大臣の能の後に演じられることもあれば、状況に応じて闌けたる音曲や世阿弥が演じた〈鵜飼〉にみる「冥途の鬼」は、「砕動風」機飼)は、やはり芸風の名称を示していないことになる。〈鵜飼〉は、やはり芸風の名称を示していないことになる。

を示さないものがあるが、そのことを習道の最終段階におこのように、観阿弥や世阿弥が演じた鬼のなかに風体名と演じられたことになるだろう。

鬼」であったと考えられる。「融の大臣の能」にでる鬼を、

いる。そのことからも、融の大臣を責める鬼は、「冥途の

技をさしたものである。それに対し、小癋見で演じられる

いられていることから、異面の〈鵜飼〉は「砕動風」の演

とを区別する名称が設けられていなかったことに起因する演じられる下三位の芸風と、他の位から至る下三位の芸風位』の「習道の次第条々」において、上三花から却来してかれた下三位の芸風であることと関連づけてみれば、『九

と考えておきたい。

『申楽談儀』の序段では、世阿弥は恐ろしい鬼を習わなでするあらたな解釈におかれた鬼の能をみることができるた鬼を、世阿弥が出家した後に演じたという鬼の「面影」は、上三世阿弥が出家した後に演じたという鬼の「面影」は、上三世阿弥が出家した後に演じたという鬼の「面影」は、上三世阿弥が出家した後に演じたという鬼の「面影」は、上三世の弥が出家した後に演じたという鬼の「面影」は、上三世の弥が出家した後に演じたというといえを強き道」とするあらたな解釈におかれた鬼の能をみることができるかに、力強くはたらく鬼ではない、「和らぐことができるだろう。

おわりに

をもたらすものとして説明される。『二曲三体人形図』のた、強く恐ろしい鬼は、物数を尽くしたなかにめずらしさウ」な芸態として示されている。観阿弥がかつて演じてい『花伝』において、鬼は「強ク、恐ロシク、肝ヲ消スヤ

の演能も、「闌けたる位の態」として是認されていた。をみせる鬼に該当するだろう。「異風」である「力動風鬼」分類で言えば、それは「力動風」の「いづれもいかつの見風」

なる芸態としての表現を必要とし、それをあらわすための極の上手が演じた強く恐ろしい鬼は、「力動風鬼」とは異じるものとされた。そして、過去における指標とすべき至演能が禁じられることで、若き為手は鬼を「砕動風」に演しかし『三道』のなかで、当流における「力動風鬼」の

あらたな習道の体系が用意されたことになる。

『六義』に示された「強き」に関する解釈をあてはめても上三花へ上り、そこから下三位へ却来する芸風のなかに、せる下三位の芸態のひとつであると言えよう。中三位からしている。「強き物」である鬼の演能は、「強き」芸風をみ種類示し、習道の段階によって演じ得る芸態の内容を区別種類示し、習道の次第条々」では、下三位へと至る道を三『九位』「習道の次第条々」では、下三位へと至る道を三

としての解釈を与えられたことになるだろう。風」の鬼の演能は、却来して心のままに演じられる「慶風」すれば、至極の上手が「闌けたる位の態」として演じた「異

る芸風としてあらわれることになる。またそのことを敷衍よいとすれば、それは和らぎて負けぬ心によって演じられ

阿弥の脳裏にあり、世阿弥の言葉を通してあらわれる。かひとつの実態としてあるはずの観阿弥の演能の姿は、世

風鬼」とは異質の姿としてあらわされていたと言える。 あらたな解釈と立体的な習道体系の構築によって、「力動 つて演じられていた強く恐ろしい鬼の姿は、強さに対する

- 7 6 能勢朝次氏 『世阿弥十六部集評釋 (上)』 (昭和十五年、岩波書店)
- 所収) 香西精氏 | 融の大臣の能」 (【宝生】昭和四十二年三月。 【続能謡新考】

1 拠るが、『三道』の「当流ニ不得心」は、宗節本と松廼舎文庫 本(影写本)を参照し、「当流ニ不得」に改めた。 以下世阿弥伝書の引用は、『世阿弥 禅竹』日本思想大系に 注

- 2 変遷——」(『待兼山論叢』第三十六号、平成十四年十二月』 拙稿「世阿弥の『鬼』再検--「砕動風」「力動風」の位相の
- 3 三十年四月) 同氏「能楽論と中世歌論」『国語』(六巻三号、昭和三十三年三月)。 と世阿弥の十六部集―」(『謡曲界』 五十巻一号、昭和十五年一月)、 小西甚一氏「能楽論における藝術思想」『国語と国文学』(昭和 峯村文人氏「中世藝術修行論の成立と完成―定家の毎月抄
- <u>4</u> 修人文論集』(四十四号、平成元年九月)では、『九位』の「中初・ の初心論をとりあげた考察がある。 上中・下後」という修業の先蹤を為すものとして、『三五記』 石黒吉次郎氏「中世芸道論における習道論序説(上)」『専
- 5 れている。 音曲条々』を、「同類の説を背景とする文であろう」と指摘さ 注1前掲書、『五音曲条々』補注一一三では、『三五記』と『五